

私にとっての看護とは何か。看護学生として日々勉強をし、実習で患者さんと触れ合う中で、目の前にいる患者さんに自分が今できることは一体何なのだろうと、あまりにも未熟な自分に悩むこともたくさんあります。そしてその度に、私はある一人の看護師さんを思い出すのです。

小さい頃から漠然と看護師への憧れを持っていた私が本当に強く看護師への道を志したのは十一歳の時でした。当時五歳だった私の弟が突然入院をしたのです。病名は急性リンパ性小児白血病。すぐに骨髄移植に向けた長く厳しい治療が始まりました。時々外泊で帰って来る弟と遊ぶことが私の、そして家族の何よりの楽しみでした。そして帰って来た弟が病院での出来事を話してくれる中、何度も名前を出てくる看護師さんがいました。弟は優しくて明るいその看護師さんが大好きで、おしゃべりをしたり時にはいたずらをしたりと、いつもお世話になっていたそうです。弟と共に病棟に泊まり込みで付き添っていた母も、「いつも笑顔で、本当に良い看護師さんなのよ。」と何度も言っていました。二人から聞くその看護師さんのお話の中で、弟と母にとって、そして私にとっても忘れられない出来事があります。それは最も大変な治療の時のことでした。弟の小さな体の免疫力はほぼゼロに近く、弟は自分のベッドからさえも出られなくなりました。けれどまだたった五歳、入院前は体を動かすことが大好きだった弟にとってそれはとても辛いことでした。ほとんど動けないことや抗がん剤による体の負担からくるストレスで、ベッドの上で泣きじゃくる弟。その弟を見たその看護師さんが「頭を洗おうか」と提案してくれたそうです。その時弟の頭は抗がん剤の副作用によって髪が無く、全くの坊主頭でした。けれどその看護師さんは気分転換にと、わざわざ洗髪車を持って髪の無い弟の頭をシャンプーで丁寧に洗ってくれたそうです。この話をしてくれた時、母は目に涙を浮かべていました。

私はこの話を聞いたことをきっかけに、自分も看護師になろうと強く思うようになったのです。そして看護の勉強をしている今になって、看護師さんがその時洗髪をしてくれたことが実はすごいことだったのだと改めて実感しました。清拭をするだけでも清潔面では十分だったはずですが、けれどその看護師さんは洗髪を通して、身体だけでなく弟のいらだった心と、弟の様子に胸を痛める母の心もケアしてくれたのです。この体験を通し、また勉強をする中で、私にとっての看護とは、患者さんの身体だけでなく心も守ることだと思えるようになりました。将来は小さな弟の髪のない頭を洗髪してくれた看護師さんのように、目の前の患者さんに寄り添う中で、患者さんの心と身体を守っていけるような看護師になりたいと思います。